

氏名	高橋 由美
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	第18号
学位授与年月日	平成29年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第4項該当
学位論文題目	災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者の ストレス対処能力を高めるプログラム開発
論文審査委員	主査 桑名 佳代子 副査 大塚 真理子, 山田 嘉明

## 論文の要旨

### 【目的】

本研究の目的は、災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者のストレス対処能力（Sense of Coherence, 以下、SOC とする）と、生活状況、健康状態およびソーシャルサポートの実態を調査し、関連性を踏まえたうえで、被災高齢者のストレス対処能力を高めるプログラムを開発することである。

### 【方法】

本研究は、以下の3部構成で行った。はじめに、東日本大震災で被災したA町において、災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者を対象に、質問紙を用いてSOCと生活状況、健康状態およびソーシャルサポートの実態調査を行った。次に、実態調査の結果をもとに被災高齢者のストレス対処能力を高めるプログラムを考案した。続いて、A町の高齢者を対象に考案したプログラムを実践し、有用性を検討した。倫理的配慮については、平成24年度宮城大学看護学部・看護学研究科倫理委員会（承認番号2011010）、平成27年度宮城大学研究倫理専門委員会（宮城大第293号）の承認を受け、対象者の体調に配慮しながら実施した。

### 【結果】

実態調査の対象は53名であった。分析の結果、SOCが高い人は、ソーシャルサポートの提供に関連し、思いやりや役割意識が高かった。交流の場を作り、SOCが高い人の特徴を生かす機会を取り入れ、参加者間の相互作用により、現状を前向きに受け止め、生活や健康課題への対処方法に気づき合うプロセスを支援するプログラムが、ストレス対処能力を高め、健康維持・向上に貢献できると考えられた。そこで、先行研究を参考にロジックモデルを作成し、アクティビティにワークショップを取り入れたプログラムを考案した。ワークショップは3回で、SOCの3要素、有意味感、把握可能感、処理可能感に働きかける。さらに地域特性や民族文化を取り入れ、高齢者が楽しみに参加できる内容・方法を選択し、進行役の働きかけやスタッフの対応を示すワークショップ実践プロトコルを作成した。

続いてA町の高齢者22名を対象にプログラムの有用性を検討した。全3回のワークショップに参加した15名のアウトカム評価では、実施後にSOCの向上が認められた。また、主観的健康感やうつ傾向が、実施後に改善した。参加者のワークショップに対する満足度も高かった。プロセス評価では、ワークショップ実践プロトコルに基づいて実施した結果、参加者の有意味感、把握可能感、処理可能感を示す反応が確認された。

### 【結論】

実態調査の結果を踏まえてロジックモデルを作成し、ワークショップ実践プロトコル

ルに基づいて展開するプログラムを開発した。アウトカム評価では、SOCの低い高齢者がワークショップへ参加することによってSOCが向上し、主観的健康感およびうつ傾向が改善する可能性が考えられた。プロセス評価の結果では、プログラムは考案した通りに行われ、参加者の満足度も高かったことから、災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者のストレス対処能力を高めるプログラムは、概ね有用であることが確認できた。今後、自然災害によって中長期に渡る被災生活を送ることとなり、うつ傾向や生活習慣病等の予防を必要とする高齢者に活用していきける可能性が示唆された。

## 審査結果の要旨

本学位論文の目的は、災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者のストレス対処能力（Sense of Coherence, 以下、SOCとする）と、生活状況、健康状態およびソーシャルサポートの実態を調査し、それぞれの関連性を踏まえたうえで、被災高齢者のSOCを高めるプログラムを開発することにある。

本研究は、3部構成で段階的に行われた。第一段階では、A町の災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者53名を対象に質問紙による実態調査を行い、第二段階では実態調査の結果をもとに被災高齢者のSOCを高めるプログラムを考案した。第三段階では、A町の仮設住宅に暮らす高齢者を対象にプログラムを実践し、有用性を検討した。第一段階の実態調査からは、交流の場を作り、SOCが高い人の特徴として確認できた、思いやりや役割意識の高さを生かす機会を取り入れ、参加者間の相互作用により、現状を前向きに受け止め、生活や健康課題への対処方法に気づき合うプロセスを支援する必要性が導かれた。第二段階で考案したプログラムは、プログラム評価理論に基づくロジックモデルを採用し、インプット、アクティビティ、アウトプット、アウトカムから構成される。アクティビティでは、SOCの3要素である、有意味感、把握可能感、処理可能感を高める3つのステップのワークショップ実践プロトコールを作成し、実態調査から導かれた内容とともに、地域文化や民族文化を取り入れた内容としている。第三段階では、本プログラムをA町の仮設住宅に暮らす高齢者22名を対象に実践し、スタッフの事前研修およびワークショップの進行役は看護職である研究者が担っている。

考案したプログラムの評価は、実施前後の質問紙法によるアウトカム評価とプロセス評価（プログラム技術、サービス提供システム、モニタリング）によって行った。全3回のワークショップに参加した15名のアウトカム評価では、プログラム実施後にSOCの向上、生きる力、主観的健康感、うつ傾向の改善が認められ、参加者の満足度も高かった。プロセス評価では、参加者のニーズに応えプログラミングは適切であったこと、参加者に適切に実践プロトコールが提供され期待した反応が得られたこと、ドロップアウト者へのフォローアップ体制の検討の必要性が示された。以上より、災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者のSOCと、関連要因を踏まえて開発した本プログラムは、被災高齢者のストレス対処能力を高める支援方法として適用可能であることが示唆された。

本研究は、プロセス評価理論の視点を用いてプログラムのロジックモデルを作成してプログラムを立案している新規性があり、SOCの3要素を取り入れたプログラムを実践して、SOC得点の変化から研究的に評価した独創性があると認められる。また今後、災害地域の支援活動を行う看護職が、災害復興期の仮設住宅や復興住宅に暮らす高齢者を対象に、地域文化を取り入れて、地域の支援者と共に活用可能という発展性があると判断し、審査委員はこれらの点を評価した。

この学位論文について2回の対面審査を行い、以下のような指摘がなされた。①災害復興期にある高齢者のSOCに働きかける意味を明確にすること、②データ収集方法と使用尺度の説明を詳細に記述すること、③実態調査から介入まで3年が経過している影響について考察すること、④看護職が進行役となることの意味・意義を明記すること、⑤ロジックモデルの改良版で「生きる力」を加えた理由を説明すること、⑥有用性の検討を行っ

**博士論文要旨・審査結果要旨**  
**学外公表用様式**

た結果から、条件付けをしながら活用できる可能性を説明すること、⑦生涯健康支援看護学への貢献性について考察すること、などであった。その後、上記の指摘事項についての論文修正が確認された。

本学位論文は、東日本大震災で被災した高齢者が災害復興期の仮設住宅に暮らすなかでの健康課題に対して、看護職が主体的に高齢者のストレス対処能力を高めるプログラムを開発したものであり、既存の看護学の知識体系に新たな知見を与える新規性、独創性を有しており、災害看護への貢献性、発展性が期待できると認められるものであることから、審査委員会は、博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。